The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	深川通言と上方語
Author(s)	中村, 幸彦
Citation	語文. 1974, 32, p. 104-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68627
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

深川通言と上方語

中村幸彦

一

江戸周辺即ち関東地方と、上方即ち京阪地方とは、古へから今日まで、別の言語圏として、語学上ではあつかってゐる。しかし江戸時代ともなれば、交通の利便もあり、文化の交流もしげく、東西の言葉は、自然と交換されては、それ〴〵に定着して行ったものも多い。そしてそれは、言語史上のみでなく、文学史、文化史の問題とも考へ合せねばならぬ面を持つ。東西の言葉の相互流入の現象の一を、以下に採上げるのも、さうした視野からである。

上方語の江戸語化、江戸語の上方語化にも、様々の様相と理由があらうが、初め流行語として行はれ、やがて一般語となる場合も、その一つ。江戸時代の流行変化は、劇場街・遊里の二悪所が、その醞醸、流布を担当することが多い。否、現代も程度の相違こそあれ、その気味がある。昭和の初め、宝塚少女歌劇や曽我家五郎劇の東京進出で、東京で大阪弁が一時流行し、最近では上方落語や松竹新喜劇の好評でも亦、同じ風潮があると聞く。江戸時代でも、上方語の江戸流入に相似た例がある。豊竹肥前掾が、堺町に肥前座を経営、義太夫節の操人形芝居の櫓を挙げたのは元文三年である。それから明和安永にかけ、江戸人士にも、大きな娯楽となると共に、太夫や人形遣ひの使用する上方語や、浄瑠璃丸本に見える言葉が、江戸人の口に上った。安永六年江戸刊の洒落本『浄瑠璃稽古風流』は、その間の情況を穿った作品であった。人形遣ひの間に使用する隠語を「せんぼふ」と云ふ。「せんぼふ」とは「隠語」の意の隠語である。「せんぼふ」については、故前田勇氏に『近世上方語考』が既にあって、詳しいことは人の知る所。更に『淡路詞』や『宝暦雑録』巻十二「大坂諸人近年詞遣替し事」の条などによれば、若干補訂することも出来る（冬野昭和四十八年六月号所版、拙稿「雅俗漫筆五」）。この「せんぼふ」が、小説類に出現したのが、不思議と江戸の方が早いやうである。従来の上方出来の八文字屋本の平明低俗にあきて、新様式を創出した江戸の談義本は、様々の俗語を使用するを、新しい写実の一方法とした。江戸語でも、職業別、姓別、年齢別に、細く写実的な言葉をもって表現した。その中に、看売のから名（宝暦四、教訓不弁舌）、日雇の隠語（既に、「せんぼ」の称さへ流用）（明和八、虚実馬鹿物語）などと共に、人形遣ひの「せんぼふ」をも、流行語の一つとして、採上げたのである。

上方浄るり座の、せんぼふとやらいふて、善事を助右衛門、悪事

を助四郎、金子をぼ玄徳、銭を新太、酒を清三などゝ、理にも当らぬ相詞（宝暦六、風俗八色談）

の如くにである。やがて安永四年の黄表紙『金々先生栄花夢』では、その登場人物に、人も知るやうに、「清三」・「ぶんずい」・「源四郎」などと名付けてある。これらが「せんぼふ」なることに気づかなければ、この黄表紙の面白さは、甚だ減少する。作者恋川春町の想定した読者の範囲では、「せんぼふ」もかなりに知れてゐたこととなる。その後、式亭三馬が『浮世床』二編（文化十一）などで、盛んに利用する。三笑亭可楽も『江戸真衛』（文化元）の中でこの元来の上方語を紹介した。理解の範囲がこれで一段広くなり、『四季の折詰花枝品々の略』と称するパンフレットでは、これを太鼓持の言葉とさへ云ってゐる。江戸における流布の大概をこれでうかゞひ得るが、一方、恐らく江戸談義本の影響を、逆にうけてであらう、上方の洒落本『くたまき綱目』（宝暦十一）や『粋のたもと』（安永九）に、「せんぼふ」の紹介があり、上方の小説類にも勿論、寛政五年の『虚実柳巷方言』の如き、花街の流行をつげる書物にも掲載されるやうになる。西から東へ、東からの刺戟で西もと、東西に流行語が移動すること、かくの如くである。

元来、隠語であっただけに、かへって、「せんぼふ」の原義や語形は、流布によっても変化しなかった。しかし普通の語においては、意味や形ちの変化をともなうものもなしとしないであらう。劇場街は当面の問題でない。遊里の方の例として、江戸深川を舞台に、東西の言葉の互に流入する様相をうかがって見ることとする。

二

遊里としての深川は、延宝五年の『江戸雀』、天和二年の『好色一代男』にも見えて、古い場所であるが、江戸市中岡場所の随一の位置について、風来山人の『里のをだ巻評』（安永元）の論に見えて、吉原に比肩しても、おとらない隆盛に至るのは、明和安永の間においてである（深川区史など）。岡場所の常として、吉原の保守的に格式高いに対し、開放的で且つ軽行きがよろこばれたであらう。深川八幡、ここは相撲や通矢を初め、催物も多く、四時の遊観地であった。それを兼ての昼遊びや、「サッサおせ〳〵」など賑々しいやはし詞の入ったさわぎ歌がよろこばれ、時々に変化した通言の行はれることを、遊里の特色とした。『岡場遊廓考』でも、

○風流歌　はやりうたは当地を第一とす。

○深川なまり　此事土地の一風なれば、此土地に久しく住んで、其佳境に至らねば知れざる事也。

○はやり言葉　「百もしよふち」「ゐんぎでもない」のるい。

○通り言葉　「きざ」「おたの」の類ひ。

○かくし言葉　此事更に余人に分らず。猶此外多くあるべし。

とある。さわぎ歌はともかくとして、通言は安永九年の『遊婦里会談』に「夫大通の通言は、深川より始る。通矢の能く通るをもって通といひ、通らざるを、不通といふ」とあり、寛政三年の『大磯風俗仕懸文庫』にも、「蜜言（かくしことば）は蛮夷の風調にして解ず」ともあって、蓬萊山人帰橋、振鷺亭、式亭三馬など、深川通の洒落本にも、代々の通言を紹介してゐる。『岡場遊廓考』に示す四つの語が、深川に発生したかどうかは考証を必要とするが、通行してゐたのは事実と見てよい。それが悉く今日にまでさへ一般語となってゐる如く、深川通言が、小説類の上だけでも、他の岡場所の洒落本や滑稽本上で

も使用されて、一般語化して行く様を示すこと少しとしない。

その深川通言なるものを、最初に紹介したのが、実に深川洒落本の最初の作品『辰巳之園』（明和七）であったことも、深川に通言ありの感を深くさせるものである。この幾通りも飜刻のある書については、その通言の部分を、ここに改めて抄記しないでおくが、不思議と、その中に早く上方の文学作品に見る語が混じってゐる。この事をつとに報告されたのは、野間光辰氏で、『川柳春秋』昭和十六年一月号「吉原はやり言葉」についての稿である。『辰巳之園』の中、

打捨て置煤掃には出る、かまわぬと云事也、物の見へぬ時云事を、諸事に用る也

の語が、宝永年間と推定の上方版浮世草子『けいせい銭車』巻三「妹背神事」の条に、

親父たいまつとぼし、まつはだかで立出、娘はおるか、旅人がみえぬ、合点ゆかぬ、こりゃ、作介よ、とも〳〵おきてさがしおらいで、何しておるぞ、作介、めをすり〳〵、尋ずとおかしやませ、すゝはきには出ませふと

とあると報告がある。この語は、上方では後々も使用され、『俳諧世説』（天明五、上方版）に、

北枝が家にて誹諧有りし時、夜更て盗人入りたり。此をしるもの北枝に告けるに、北枝打笑いて、いづれ煤はきには出べきものなりと、ざれ言いひて色もかえず居たり。

と見える。恐らくこれは、著者闌更の修辞と見てよろしからう。江戸でも、この後には、

うっちゃっておけ、すゝはきには出よふといったのは、このこったろう（安永四、金々先生栄花夢）

「まってくれおれがいたじめのきせるづゝが見へねへ」「うっちゃっておかつし、すゝはきの時に出ら」（文化三、鳴子瓜）

の如くに、一般にも用ひて行った。この一例によって他の語を見渡すに、『辰巳之園』の通言中には、外にも、元来は上方語らしいものを見出すことが出来る。その一つ、「あゝらっちもねえ」は、上方では、

身に引まといねて見ても、ひとりころりはヱゝらっちがない（宝永三、心中重井筒）

風雅なる誹諧を、もてあつかひがわるひゆへに、らちもないものにしなくだりたり（宝暦十一、列仙伝）

ラチモナイ　よしなき（寛政四、詞葉新雅）

など、殊に義太夫浄瑠璃には、いくらも見える。勿論一般語でもあったが、「あゝらっちもねえ（上方ではない）」は、江戸の五代目市川団十郎の「あゝつがもねえ」（「つがもない」の語は上方でも早くから使用）に対して、歌舞伎役者の「せりふ」の気味がある。それも上方役者らしいが、誰であったかは、今急に推察できぬは残念である。『辰巳之園』の本文に出るこの語も「大勢ロをそろえてア、らっちもねエ」とあって、恐らく声色で発声したものと思われる。

『辰巳之園』には、通言の中に唐言（からこと）と称して、今日の言葉で云へば、はさみ言葉をも加えてある。『金々先生栄花夢』にもこれを利用した場面もある故に、詳しい説明は省略するが、カキクケコの五音の字をはさむ例を説明の末に、

此外に、し付、き付、などゝ云て、其時におうじて、一字置に、付る也

と述べる。恐らくこれは、深川の茶屋、子供屋（芸娼妓の置屋）も多いので、家々で、はさみ言葉も違って行はれたのが、やがて混淆し、種々のものが行はれるに至ったとでも解すべきであらう。ただし、し付、き付の例は洒落本類にいまだ所見がない。しかしやや後年の編であるが、浜松謌国編の『摂陽落穂集』巻四に「大阪市語の事」のうちに、「隠語のあらまし」として、大阪市中の通り符帳の一端を示した中に、

其外、物の名を逆にいひ、シの字を立入て、かねというには、ネシカなどいえる、……

と見える。これらは通り符帳であるから、この編著時よりは、古くから、大阪では使用されて来たものと思ってよい。とすれば、深川の「し付」との関係をも考えて見る必要があるかも知れない。逆語の隠語は、最も普通で、どの社会でも思いついたものらしい、相互関係など、うかつに云へるものではないが、深川にも逆語があって、

此うつという事は、つうをさかさにいうゆえ、ふつうといえる、当時の通言なり（安永八、伊賀越増補合羽之龍）

などと一ひねりひねって、行はれたらしい。

『辰巳之園』では、以上僅かしか見出せないが、何故に上方語が、深川の通言の中に混ずるのであらうかを、以下に考へて見る。

三

『辰巳之園』に登場する客には、御国衆即ち勤番侍と、その同僚の江戸詰の侍の一群がある。今一つは「御屋鋪から御出遊した」「勝手用人とも、云かっこふ」の先の一群とは格の高い侍と、その「下役手代と、云なりの男」の二人を、出入の商人が案内して来た別の群である。五郎兵衛と称する商人は、侍との応対を見るに、大店の番頭級と見えるが、この小花屋（実在の仲町の尾花屋を指す）では、顔がきいてゐて、侍から「是は、ざんねんびんしけん。五郎兵衛がお馴染を、見やうと思ふたら」などとひやかされてゐる。

『辰巳之園』の作者については、吉原妓楼上総屋の主人宗義観一麿で、降盛の深川の私娼街をあばく目的をもって、執筆したとの説（書物展望百三号所収、綿屋雪「洒落本辰巳之園の著者」）がある程で、この客筋についても、実情を穿ってゐると思ってよい。勤番侍や商店のいはゆるお店者が多かったのである。この後に続く深川洒落本を注意して読めば、そのことは益々明らかである。勤番侍はしばらく置いて、お店者については、

四ッ明きの拍子木は店者の足を早め、八幡のぢゃん〳〵は子息株の胸にこたへ（安永八、美地之蛎売）

店ものでゐへだ膳なしの床廻し、ちょんの間契りのずい帰りというやつさ（安永八、深川新話）

菓子屋を悪む新川（酒蔵が連立した所）の番頭も、蒲団の柏餅に包れ、（安永八、龍虎問答）

東山に妓を携し漢土の驕者も、いまだ綵鋪肆（どうぐや）の出番のちょっきり遊び、酒肆（さかだな）の枝蔵がへりのたのしき事を知るべからず（寛政二、仕懸文庫）

と。外にもあるが、以上でも様々の生態を述べてゐる。勤番侍やお店者が深川の嫖客には特徴的に多かったのである。『岡場遊廓考』でも、深川の「客」の見出しで、

むかし吉原にては屋形衆店衆といへる。此土地にては屋敷もの店ものと云、是にて其はだあいを知るべし、よくさはぐを出ばんと

いひ、大たぶさをやしきといひ、看うりをうぎ客と唱る類多し、かゝる心賤しき客には得て揚代の不足なるものにて、船宿の請込にて帰るを下ッていくといい、附馬の言葉より猶はづべし

と、手きびしいことを云ってゐる。吉原では侍も大身、商人も大店の主人息子が多いが、深川では勤番侍や、番頭手代の使用人が多かったのである。同書は又、特に夷講客の柄の悪さを、特別に挙げてゐるが、これもお店者達の大一座であって、十月の夷講には年に一度の開放されたからさわぎの宴会が、数々深川の妓楼では催されたのである。勤番侍やお店者は、主持のこととて、門限がある。お店者は出番とて休暇の下りた日は、多少の余裕こそあれ、「ちょんの間契りのずい帰り」が多く、出番の時すら「ちょっきり遊び」。昼遊びで賑々しくさわぎ立てる遊びが深川の特色となったのも、一にこの客筋の故でもあった。

お店者達は、商取引の上で、それ〴〵の職業によって隠語が多い。梅垣実氏の『隠語辞典』でも、数の隠語を別に上げてある如く、数の隠語のおびたゞしいのは、江戸時代以来の商習慣の結果である。江戸時代の例は、大阪のものは『摂陽落穂集』巻四や『筆拍子』巻十に、江戸の例は『万法重宝秘伝集』(天明七)などに見える(煙草屋・紙屋には共通したものがある)。数以外の隠語も勿論多かったことであらう。これ又諸書に散見してゐるが、前述の深川客のお店者の如く、無教養な者は、遊びの場、酒の上で、面白がって、隠語を使用することは、古今に通じて変りがないのではなからうか。京伝の『仕懸文庫』には、深川に多い酒蔵の蔵出しに来た客に盛んに、酒商の用語を使用させてゐる。客につれるのが水商売の、これも亦習ひであって、それらの隠語のあるものは、深川の通言になってゆく。ここに面白い例がある。恐らく佐賀藩士ではないかと思はれる著者が、文政十年、深川を舞台に『風流辰巳妓談　楠下埜夢』なる一種の洒落本を作ってゐる。その稿本を中野三敏氏から示されたが、中に舟宿の船頭をして、「なんぞうめへものを、御馳走しねえけりゃ、わりいばい」と云はせ、さて注して、

「ばい」とは肥前の口上、舟宿の男など、真似をする、御客へのつとめ也

と云ふ。これは深川の風儀を物語るものである。そのつもりで読めば、深川の通言の中から、お店者の隠語から発したかと想像されるものを何かと見出すことが出来る。

この「まさ」という事は、通といふことなり、「けずって見れば」とは、付合って見るといふ事也、「ふしの有」とは、ふつうといふ事也(安永八、伊賀越増補合羽之竜)

此「ふしんかた」とはめしを食ふ事也(天明二、富賀川拝見)

(これを使用した文章は略して、注のみを引用)

の如きを深川通言として紹介してゐるが、どう見ても、大工又は材木をあつかふ者の隠語と思はれる。思ふに深川には木場が多く、地名になってゐる程である。この材木をあつかふ商店のお店者達も、深川遊里の客にあったとすることも、すこぶる自然であって、そこにこの種の通言が発生したのであらう。

口をきるという事は、大いそ(深川のこと)の通言で、青楼(吉原のこと)なら、しまひにやるとおなじことだ(寛政二、仕懸文庫)

しまひ(仕舞)は、あらかじめ妓を揚げる約束をしておくことで、「仕舞」の語は、深川でも通用する(岡場遊廓考など)。それを「口

をきる」と云ったのは、茶の口切もあることながら、酒樽の口をきると同様に云ったので、酒問屋の用語からの転ではなからうか。樽の口を切るの語は、狂言や近世前半の文学書にも見へる処、用例までにも及ぶまい。又京伝が酒問屋での符牒をこの書で云わせていることも前述した。しかし「口をきる」とは、先づ話をしておくの意で、現今も通用の語である。一概に深川通言に片よせて結論は出せないが、京伝の云ふ処に従へば、現今の語は、深川通言から一般化したかとも考へられる。京伝はこの書でまた、呉服屋の隠語の一つ、金一分のことを「ナル升一チ」と云うことを紹介して、一方で妓の一人に

おめへどうする祝義をやらざアなるめへ、ナル升一でよかろうかの

などと、使用させてもゐるのである。戯作類に見える語を、当時の風習を正確に伝えるものとするのは、注意を要することであるが、通言などは、一種の紹介の意も含まれてゐるので、ある程度は信じてよからう。文学書としての深川の洒落本では、以上の如く客筋を明らかにしないで、嫖客を登場させるものもあるが、読者がそこに気付き、その背景の知識を持たねば、洒落のわからない場合もある。通言の理解と相待って面白さの初めてわかるものもある。洒落本鑑賞上の一注意ともなるであらう。

勤番侍の深川遊びは、江戸の長い独身生活の鬱を散する為もあった。が同じく江戸での独身生活を長く続けねばならぬ者に、江戸時代にはおびただしい数に上ぼった、上方商店の支店即ち出店に勤める、江戸下りのお店者があった。京阪のみならず、近江商人・伊勢商人を合せた支店の数はおびたゞしく経済史の方面では、調査されてゐることであらう。その店員ともなれば、かなりの数であったらう。これら、今の語で云へば「江戸チョン」も、軽行きな深川遊里に遊ぶ店者の中で、かなりな率を占めてゐたと思う。安永・天明の深川洒落本には、「付ケのぼせ」の語で、上方出身のお店者が出てゐることを知る。この語は云ふ迄もなく、江戸店即ち江戸の支店へ、上方から下ったお店者が、不始末をして、上方へ帰されることである。川柳にも見える処、

つけのぼせ母はにくさとなつかしさ（柳多留・四）

つけ登せかつこうものにくらいこみ（同・六）

つけ登せつゝいっぱいのろぎん也　（同・五）

この原因は、恰好ものにくらい込んで、色遊びが高じた末のつかい込みが、文学書ではお定りである。

面白いよふには、ござれども、付のぼして、何とも気のどくにぞんじます（安永八、龍虎問答、ただしここの意味は、たとえで、直接の意ではない）

此道中を廻って仕まふと（深川の妓楼を色々経験するとの意）、すぐに京へ付ケのぼせさ（天明二、富賀川拝見）

京伝の寛政期の作に至ると、流石に芸はこまかい。上方者に上方語を語らせ、その穴を穿ってゐる。

折ふしむかう座敷には、上方ものとみへ、ものずきなきゃく、むしょうにあなをきゝたがるやうすにて、客「コレごふく店のきゃくの穴を、すこしいうてきかしゃいの」、船頭「ごふく店の衆の遊山にでるのを出番と申やすが、出ばんのあたるのは、正・二・六・八の月サ、仲間の通言にやァ、つけのぼせになる事を、つけ衆になると申やす、又それをしゃれていふときは、浅黄のもゝ引

松坂島共申やす（以下、通言の紹介が続くが、醜刻も多いもの故略）」

京伝のこの試み以来、振鷺亭の『玉の牒』（寛政年間）や小金あつ丸の『岡女八目佳妓類』（享和年間）にも、呉服店の上方者を登場させてゐる。その事に気づいて深川酒落本を読むと、『二日酔巵觶』（天明四）や『玉の牒』などには、遊妓の方にも、上方から下った者が見える。実際深川の妓には、上方下りもかなり存在したことを示すものであらう。上方下りの妓は、上方下りの店者を相手とする為のみではないが、少くとも、これから述べる、深川遊里に上方語が行はれる一つの原因になったであらう。深川酒落本で、上方者のあらはに登場するのは、寛政に入ってであるが、「つけのぼせ」の語は、安永天明、そして同じ語の見える『柳多留』四編は、『辰巳之園』刊行の前年、明和六年に出てゐる。『辰巳之園』頃から、上方から下った江戸店の連中が、ここの遊里に出入して、上方語や、自分らの隠語を使用してゐた。これを相手にする深川遊里の人々も、その面白さうな、「打捨て置煤掃には出る」とか、声色で云ふ「あゝらっちもねェ」（上方では「ない」）などは、やがて通言になって行ったものと思はれる。

かかる事を考へて行くと、まだ十分に検討してゐないが、『辰巳之園』の通言の中で、

長竿　悪敷すると云事也

出もの　右同断

の、「出もの」も、「長竿」同様、それまで親しく馴染んでゐた者と縁を切るの意である。それなら今日も、「払いもの」のことを、上方では「出もの」と云ひ、その初めは商人言葉であったとしてよいので、これも上方語、もしくはお店者の口から出たのではなからうか。判断とか相談とかの意の「つうくつ」の語は、通言とされてないが、深川酒落本にはしきりに見える。これを文学書に求めるに、先にしては近松の浄瑠璃や八文字屋本にいくらも用例あり、後にしては江戸の黄表紙・滑稽本にも見える。

おめへがとんだ不通なら。どうでもつうくつが出来るけれど（安永八、美地の蛎売）

おのれ〳〵が通くつ咄しに、身を入れ（安永八、龍虎問答）

此のごろ内度々くるからいろいろとつうくつして、（寛政十、辰巳婦言）

○

惣兵ェとつうくついたし、いばら木屋をば私請合（宝永五カ、淀鯉出世滝徳　上）

親かたと通屈の上相談すべし（享保三、女男伊勢風流、二・二）

○

御やしきの御茶屋へ参ればその通ウくつがわかりかねます（天明二、歌舞伎の華）

観音、千兵ェとつうくつしたまひ（天明五、大悲千禄本）

これらも、或は深川の遊里を通って、江戸に流入した上方語であったらうか。「付ケのぼせ」の語からして、上方商店の用語でないかと思はれる。たとへば、上方から下した商品が粗悪で、返送する場合などであれば、誠に恰好であるが、その例をまだ知らない。又、上方では大男を云ふ「すまたの切れ上った」の語が、　江戸のすらりとした女に云ふ「小股の切上った」の語に変じたものと考えて、その変化が、深川遊里に於て行はれたと見ては如何かと、考へたこと

もある（冬野昭和四十八年三月号所収、拙稿「雅俗漫筆四」）。

四

深川通ひの江戸下りの店員達は、上方語をこの里にはこんだのみでなく、この里の通言を、上方の遊里や、世間一般に輸入することがなかったであらうか。

その一つ『辰巳之園』の通言に、

ちゃら　うそつく人になぞらへて云

とある「ちゃら」について考へて見る。この語は恐らくは、

ちゃらくら　焚そこない（明和六、吾妻錦）

ちゃらくら　遣り手が留守（同）

（「何もかもやみ雲助の旅の空」の付合に）雨よ月よとちゃらくらの夢（明和八、俳諧名物鑑）

など江戸の俳書に見える「どちらかわからぬ」とか、「よいかげんなさま」を云ふ「ちゃらくら」の下略して出来た語と思はれる。この語が深川通言となってからは、「ちゃらくら」と共に使用され、「ちゃらける」、「ちゃらかす」の動詞が出来、「ちゃらもの」と云ふ名詞も出来、「ちゃらぼこ」と名詞や形容動詞に用ひるものも作られて、大いに用ひられた。

このやっこだこにつき、ちゃらくらを申、日本へかえりたくまいり候（安永八、親父否早学問）

何やら吉にはなしをすると見へて、むねをつらまい、ちゃらけながらあとへ帰る（天明二、登美賀遠佳、たゞしこの使用は、「じゃらける」と混じてゐるやうである。同書には又、「たん〳〵しゃらけがゝり三人にて咄し有」の例もある）

三人の女郎もかけ来り、おや何でごぜへますエ、とんだお客だヨきついしゃれさなどゝ、ちゃらかしても、一向聞つけず（寛政十、辰巳婦言、これは、「ごまかす」程の意）

いや其元は茶やものではなふて、大きなちゃらものじゃ（安永六、郭中掃除、洒落なので、どれ程固定した語かわからぬ）

古着屋めをちゃらぼこで、はぐらかして（文化五、膝栗毛、七上、『嬉遊笑覧』、五下には「ちゃらほら」として見える。）

この傾向が、上方へも伝へられて、やはり遊里の通言となったものと見えて、寛政期に入ると、上方の洒落本類にも、次第に見え、一般にも及んで行った。

そこで此ほうもすかさず、ゑいかげんにちゃらついて、ちやうしあはしておき升たが（寛政六、北華通情、大阪曽根崎）

「ムウあげるると言ことか、それはきさま、いにしなに、末吉町通るなら、まる豆腐屋の内をのぞいて見たかよい」「エ、そんなちやらは聞とふナイ」（寛政九、うかれ草紙、祇園）

江戸の洒落本では、揶揄されっぱなしであるが、流石に商人、輸出には輸入、深川の経験を持ち帰ったものと、見てはいかゞであらうか。

ただしこの「ちゃら」のもとをなすと見た「ちゃらくら」が元来江戸語であったかどうかについては、若干問題がある。鈴木勝忠氏編『雑俳語辞典』には、宝永元年大阪刊の雑俳書『千枚分銅』から、次の一語を掲げる。

ちゃらりくらり（同書の見出しに「ちゃらりらくり」とするは誤植）口先でごまかす形、「ちゃらりくらりと〳〵、姥で候姪で候とて過キてゆく

と。上方の早い例を外に知らないが、江戸の「ちゃらくら」は、この語から出たことは明らかである。或は、上方には既に、近松の作品にも見えて「じゃらくら」、それを略した「じゃら」の語もある。それらに応じて「ちゃらくら」の出来たのは、上方であったとしてもよいのである。かゝる考えからすると、「ちゃらくら」から、「ちゃら」に略して、深川通言としたのみが、江戸での変化であったのかも知れない。すれば、上方の「ちゃらりくらり」が、上方又は江戸で「ちゃらくら」と転じ、深川通言として「ちゃら」となり、その形で上方へ再輸入されたと云ふこととなる。

深川通言の上方への流入、上方語が江戸へ流入し、姿や語義をかえて、上方へ帰る例など、外にもあるやうであるが、今回は、たゞ深川通言をめぐる、僅の例のみで擱筆する。

（関西大学教授）